

説教余滴 2018年7月22日

各地で生活してきて考えていたのは、梅雨時の、そして台風シーズンの水源地帯の降水量のことでした。関東の平野部が乾燥状態でも、周囲の山地・山間部に雨が降り、ダムが満水状態ならよろしいのですが、平野部は雨が降ったのに水源地帯はすっかり干上がっている、という状態は困ります。

今年の関東地方は6月6日ごろに梅雨入りし、先週までは梅雨空が続いていましたが、6月25日と26日はまるで梅雨明けしたかのような強い日差しが照りつけています。25日までの東京の10日間の降水量の合計は50ミリと、平年のおよそ76%で平年より少なくなっています。おとし2016年は、冬季・関東の雪不足や、5月からの雨が少ないことが影響して、取水制限が行われるなど深刻な水不足となりました。今年はどうなるでしょうか。

今年の利根川上流8ダムの貯水状況を見てみますと、現在、貯水量は平年より少なく、6月26日現在で8ダム合計の平均比(本日の貯水量と貯水量の平均値(平成4年～平成29年)に対する割合)は89%となっています。

関東甲信地方の最新の3か月予報によると7月の降水量は平年並みか少なく、8月と9月はほぼ平年並みの見込みです。梅雨の時期にしては降水量が少なめになり、水不足が心配されます。

東京都水道局は、「転ばぬ先の杖」とばかりに、既に取水制限を始めました。都民の日常生活に影響はない、ということです。心理的影響を狙っているのかもしれませんが。今から取水制限、台風が少なかつたりしたら、水飢饉、渇水となる。節水しよう、となることを狙ったのでしょうか。

干ばつは日照りともいわれ農業災害を起こす重要な原因でしたが、近年は水利灌漑施設の発達によって日本では農業被害は減少し『ひでりに不作なし』とまで言われるようになりました。一方、人口の増加に従って飲料・工業用水不足の問題が深刻化して、渇水と呼ぶことが多くなりました。